

勝林寺報

賀状を書きながら、年賀状を書きながら、いろいろなことを考  
みました。

この一年いろんなことがありました。地震や台風。そんなものに出会って始めて気づく山川、自然の荒廃状況。山を守らなければ、これ、何度も繰り替えすることになるはず。これらはしかし成るべくしておこった災害であつたが、とくに今年は、なんと予想も予期もしなかつた災いが、しかもわたしの身近なところで勃発してしまいました。

学をいたしました。が、それからは苦労とう苦労はほとんどありません。公職につけたからではようが、毎日弁当持つて役所に行つて、同じような仕事を同じ時間つとめて定年になるまでなんとなく過ごして参りました。それからは地域の役員・区の議会議員など勤めている間におやじおふくろも順調に送ることができました。まさに順風満帆、人様から羨まれるばかりの七十有余年であります。家内も元気、子どものみな順調。

どうなか、この世には、あつてはならぬ不測の事態が、しかも突然に襲つてくるものだと言うことを、わたしはじめここにきて遭遇しました。

登り坂・下り坂、そして「まさか」という坂があるんだよとはどこかで聞いたような気がしますが、現実にそんな坂にぶち当たると、全くおであげです。

私がゼロになつてしまひます。

今までが順調であつただけに全くの未経験と言つばかりでなく、自信もなにもふつとんでなんの力も術もないゼロ人間にしか過ぎません。

「今までひとかどの人間として生きていたつもりのわたしは一体何であったのか。家のため、妻のため子のため。または人のため社会のためと思って生きてきたわたし。それで自己満足し、ときにはうぬぼれ。それを力に生きて来た七十年。考えて見ると所詮「自分」のためだけに生きてきたのではないのか。

自己愛というか我欲というか。「◇◇のため」というのは、汚い我欲貪慾をカムフラージする「言い訳」というか「仮面」と言うか、お説教によく出てくる「虚偽不実」というあれだったのだ。

降って湧いたような「まさか」の事態のなかで、始めて気づいた私のあからさまな人生の実態。

私は今、自分にこう言い聞かせてています。

歳だぞ。七十三にもなるんだぞ。老人なんだ。老人を生きると云うことは。どうするとか。

老人と言うものは、今まで「当てにしていたもの」「力に思っていたもの」「頼みにしてきたもの」それらが年々失われて行く。それが老いると言うこと。

なかには歳寄つても「何にくそまけるものか」とそんなものにしがみついている歳よりもいる。所詮「歳よりの冷や水」と笑われるのが関の山。

「捨ててこそ」と言つたお坊さんがいたと言ふ。

我欲・我執・おれがおれがを捨てるとは、なかなかできることではない。が、その我にとらわれてどうにもならないわたしを、それを念じ願い照らしていてくれるものがある。そのおおきないのちのなかに、丸ごと自己を投げ入れると教えたのが親鸞や道元の仏教だと言ふこと。

これはある先生の話だが、いまのわたしにはじわーっと来たお話しであつた。

カムフラージする「言訳」というか「仮面」と言うか、お説教によく出でくる「虚偽不実」というあれだったのだ。

私は今、自分にこう言い聞かせて います。  
歳だぞ。七十二にもなるんだぞ。老人なん  
だ。老人を生きると言うことは。どうするこ  
とか。  
老人と言うものは、今まで「当てにしてい  
たもの」「力に思っていたもの」「頼みにし  
てきたもの」それらが年々失われて行く。そ  
れが老いると言うこと。  
なかには歳寄つても「何にくそまけるもの  
か」とそんなものにしがみついている歳より  
もいる。所詮「歳よりの冷や水」と笑われる  
のが関の山。

我欲・我執・おれがおれがを捨てること、  
は、なかなかできることではない。が、その  
我にとらわれてどうにもならないわたしを、  
それを念じ願い照らしてしてくれるものがあ  
る。そのおおきないのちのなかに、丸こと自  
己」を投げ入れると教えたのが親鸞や道元の仏  
教だと言うこと。

成人式  
おめでと

(敬称略)

坪木	翔平	(太田)
山田	真唯子	(寺坂)
中嶋	裕也	(上村)
斎藤	清喜	(小田)
田中	貴士	(小田)
横山	邦充	(上村)
原田	勝則	(浅倉)
中島	裕美	(川原)
森友	孝裕	(市場)
初田	知也	(唐川)
坪木	健	(出合)
生田	笑彩	(出合)
蔭山	真人	(小谷)

三日	初参り		
四日	但東町初参り		
五日	六日	本山・別院巡回	
九日	森友敏裕氏宅法事		
十日	坪口女中講	坪口報恩講	
十一日	坪口報恩講		
十二日	坪口報恩講		
十三日	和屋報恩講		
十四日			
十五日	榎見報恩講	榎見女中講	
十六日	朗読ボランティアあすなろ	出石A地区報恩講	
十七日		出石B地区報恩講	
十八日		出石C地区報恩講	
十九日			
二十日			
二十一日			
二十二日			
二十三日			
二十四日			
二十五日	あすなろ(録音)		
二十六日			
二十七日	出石町役場		
二十八日			
二十九日			
三十日	宗学院別科		
一月一日	代議員会		
二日	神義城主洋子		
三日	別科		
六日	勝林寺仏社総会		
十一日	仏婦会計議員会		
十二日	副会長	勝林寺住職	
十三日	会計	坊守	
十四日	事務局	前住職	
十五日	副会長	西池	
十六日	会計	西池	
十七日	事務局	西池	
十八日	副会長	田中	
十九日	会計	大石	
二十日	事務局	玉井	
二十一日	副会長	宮嶋	
二十二日	会計	永井孝	
二十三日	事務局	千秋	
二十四日	副会長	斎藤	
二十五日	会計	横山	
二十六日	事務局	足立	
二十七日	副会長	岡野	
二十八日	会計	斎藤	
二十九日	事務局	大石	
三十日	副会長	田村しめの	
一月一日	会計	岸下	
二日	事務局	斎藤きく枝	
三日	副会長	菊美	
四日	会計	藤川	
五日	事務局	貴恵	
六日	副会長	斎藤昌子	
七日	会計	斎藤睦美	
八日	事務局	斎藤純子	
九日	副会長	田中平野	
十日	会計	坂本玉井	
十一日	事務局	坂本山田	
十二日	副会長	博文弘三	
十三日	会計	節夫幸夫	
十四日	事務局	一郎隆幸	
十五日	副会長	一郎弘三	
十六日	会計	彦光隆	
十七日	事務局	芳輝彦	
十八日	副会長	美芳	
十九日	会計	美菊	
二十日	事務局	枝きく	
二十一日	副会長	枝斎藤	
二十二日	会計	下斎藤	
二十三日	事務局	下斎藤	
二十四日	副会長	下斎藤	
二十五日	会計	下斎藤	
二十六日	事務局	下斎藤	
二十七日	副会長	下斎藤	
二十八日	会計	下斎藤	
二十九日	事務局	下斎藤	
三十日	副会長	下斎藤	

一月（睦月）のことよみ

「あそぼ」つていつたら  
いのうえゆうき(三歳)  
おかあさん  
お友だちって  
どうやつて作るか 知つてる?  
「あそぼ」つて いつて  
その子が「いいよ」つて  
いたら  
もうお友だちなの  
だから  
ゆうは  
いっぱい  
「あそぼ」つて  
いうんだよ



吉をかけあつて  
縁を大切に

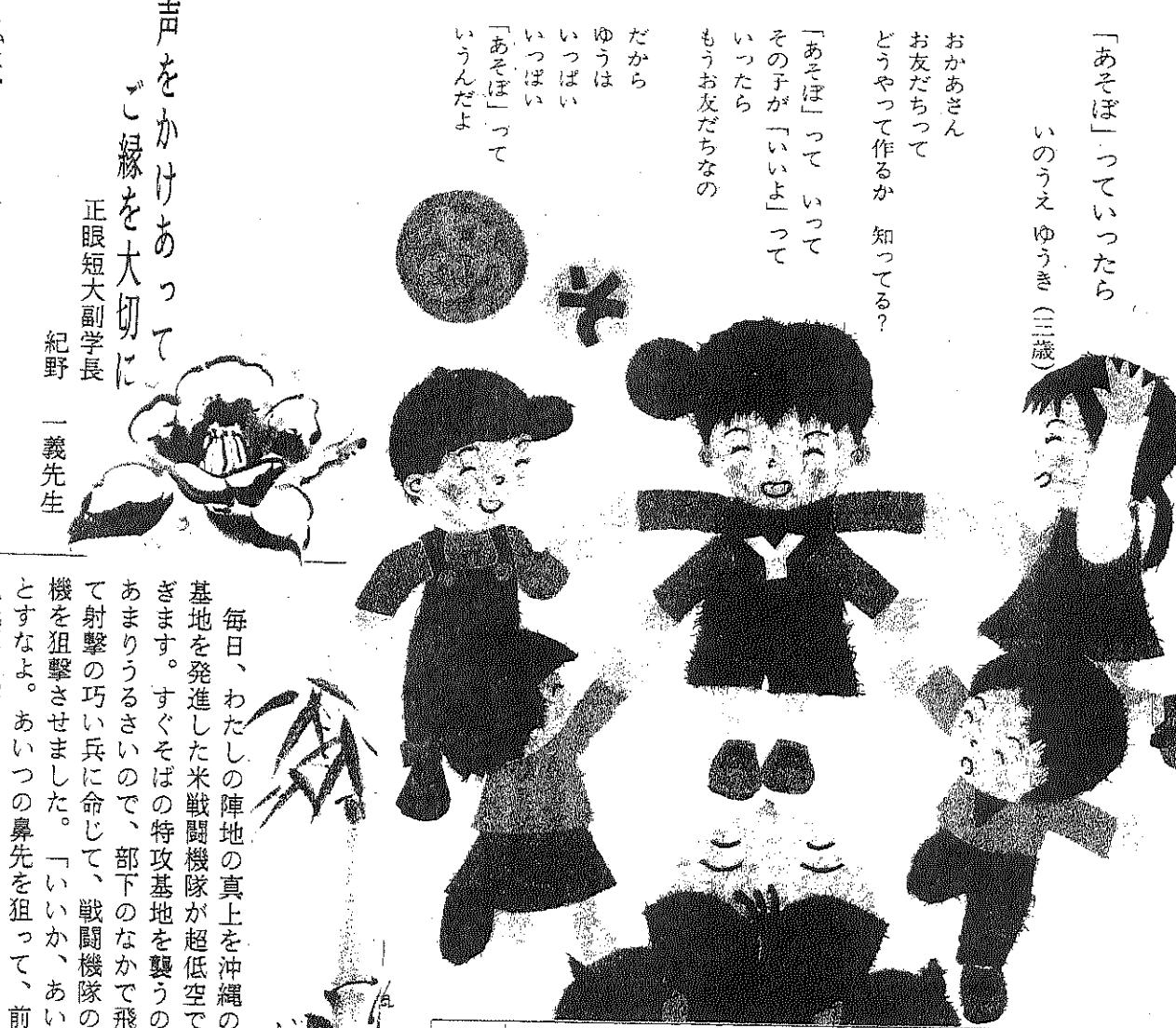
正眼短大副学長 紀野 一義先生

私は、このお正月で八十二歳と四ヶ月になります。お正月になるいつも「よくまあ、こんな年まで生きたものだ」と思っています。

私は東京大学二年のときに学徒動員で広島五師団工兵連隊に入れられ、半年後に工兵学校に入り卒業して将校に任官するやぐにフィリピンの戦場に送られ、輸送船団は全滅して、私の船だけは命からがら台湾の基隆港に入港して助かりました。それからは毎日、米戦闘機隊の銃撃で何度も死にかけたが死なず、やつと終戦になつて命が助かりました。

毎日、わたしの陣地の真上を沖縄の嘉手納基地を発進した米戦闘機隊が超低空で飛び過ぎます。すぐそばの特攻基地を襲うのです。あまりうるさいので、部下のなかで飛び抜け射撃の巧い兵に命じて、戦闘機隊の編隊長機を狙撃させました。「いいか、あいつを落とすなよ。あいつの鼻先を狙つて、前へ前へ夷光弾を撃て。決して当てるなよ」「どうして、ありますか?」「あいつにな、この上を通るな。別のコースを行け、と教えるためよ」「わかりました」。彼は見事にやりました。編隊長機は翼を振つて去つて行きました。

去年、家内とドイツに行き、歴史のある古い町の小さなレストラン二入つて食事して入ると、若いアメリカ空軍将校の一家がドヤドヤと入つて来て、私のすぐ横の席に座りました



子どもたちの携帯でやりとりするメールが、時には悲惨な事件につながったこともあります。ゆうき君の詩から、人と人との直接向かい合い、「言葉」で話すことを通して、いのちが響き合う人間関係をと願っています。

《編集室》

た。その将校が、私の顔を見るなり「ユーは、元日本軍の将校ではなかつたか?」と言うのです。「そうだ。そういうあなたはアメリカ空軍の将校だろう」「僧だ」。そこで私は、例の編隊長機の話をしました。その男は聞くなり、「それは私の父親だ」と絶叫し、店の中じゅう大騒ぎになりました。こんなこと、あるんですねえ。

ご縁のある人が、私たちのまわりにはいっぱいいるんです。おたがいちょっと声をかければ、エエツという大騒ぎが始まるのです。みんなで声をかけあってご縁を大切にします。

「ないおん」誌一月号より

月刊誌『ないおん』は保育に携わっている先生むけの新聞です。上の切り絵と詩の下に編集室のコメントがあります。読みづらいので写しなおします。

「子供たちの携帯でやりとりするメールが、時には悲惨な事件につながったこともあります。ゆうき君の詩から、人と人との直接向かい合い、「言葉」で話すことを通して、いのちが響き合う人間関係をと願っています」

ことばをかけ合いましょう。ごあいさつの言葉を掛け合いましょう。いのちが響き合う人間関係が育ってきます。人と人の不思議なご縁も見て参ります。たとえ「ことば」を失った人とでも(いえ、そのような方であるからこそ)「いのちが響き合う人間関係」がもてる機会を、わたしは毎日「はこべの家共同作業所」で体験させていただいています。

わたしにとつては、親よりも大切な大切な人でありましたのに、この別れは何と爽やかなことでしょう。しこたま苦労をかけた申し訳なき後悔はあるものの、お婆ちゃんの生前日ごろの暖かさが、亡くなつた今でも、今まで私を包んでくれるからです。

お婆ちゃんはずつと若い時分から、お淨土に生きていたと思います。と言うのは、折々おばあちゃんは「ここは淨土に遊ぶなり」などといつてはお念佛しい暮らしております。ほとけさまといつしょの世界にいたり人ですか、だから死んでもスーとお淨土のほとけさまのところへ一足飛びにいったのだと思ひます。

それからもう一つ、わたしが今もお婆ちゃんをこの身のそばに思うことができるのは、おばあちゃんたら、元気な時分から「お前のことを思うたら、昼でも晚でも安閑とはしてはおれんワ。死んでお淨土に参つても、お前に寄り添つて、利益衆生きわもなし忙しいこつちゃ」。こんなこと、ことあるごとに言つております。

「ああ、それ、還相回向」げきこうこう言つてな、お淨土にまいつた人は、如来さまのお力で、お釈迦様と同じように、すぐにこの世に還つて来て、ほとけさまのお仕事を手伝うやといふ淨土真宗の教えのことなんや」

(註)

安樂淨土にいたる人  
五濁惡世にかえりては  
釈迦牟尼仏のごとくにて  
利益衆生はきわもなし

（親鸞さまの和讃）

そうするとお婆ちゃん、生きているときも死んでからも普通のいのちとは違つたおおきな仮想のいのちのなかにいやはつたんか。そんな気も致しますのです。

わたしは、父の顔も知りません、母も小学校2年のとき死んでしまいました。だから、全くのおばあちゃん子で育ててもらいました。甘えかされ可愛がられたのをいいことに、

そうするとお婆ちゃん、生きているときも死んでからも普通のいのちとは違つたおおきな仮想のいのちのなかにいやはつたんか。そんな気も致しますのです。